

被害者の手記

私の人生を変えた自転車事故

南房総市 79歳 女性

平成19年4月10日の夕方、ゴミを出しに行ったあと、いつものように散歩をしているときでした。港に行くのに細い道を歩いていると、いきなり「ドン」と後ろから衝撃を受けたのです。

何が何だかわからないうちに前のめりに道路へ倒れ、気が付くと、私の体の上には自転車ごと小学生くらいの男の子が乗っかっていたのです。起き上がろうとしたら左足に激痛が走り、起き上がることもできず救急車で病院に運ばれ、そのまま手術、入院となりました。左足の大腿骨が折れていて1ヶ月の入院となってしまったのです。

事故から3年以上経った今でも、私の左足には手術の時に入れられた金属が残っていて、横になると布団に金属が当たって、嫌でも事故のことを思い出してしまうのです。

事故以来、足が不自由になって、長い時間立っていることや歩く事もままならず、朝、歯を磨く時でも洗面所に寄りかからなければ歯を磨くこともできません。何をしても時間がかかってしまい、こんな自分の体が情けなく、泣きたくなくなってしまふこともあります。

先日家の中で歩いているとき、何でもないところでつまずいて転んでしまい、腰の骨や手の骨を骨折して、また入院してしまいました。

今では1日のほとんどをベッドに腰掛けテレビを見ているだけの不自由な生活になってしまいました。家族にも迷惑をかけ、申し訳ない気持ちでいっぱいです。以前はどこに行くにも自転車に乗って自由に出かけることができたのですが、今では友達に会いに行くこともできません。

相手の自転車は保険を掛けていなかったそうです。補償金の工面がなかなかでき

なかったようで、学校で掛けていた子供の傷害保険を使って、なんとか出してもらいました。医療費をまかなえる程度でしたが、相手の苦労もわかっていましたので、それで示談としました。

相手の男の子に対しては、事故を起こしたくて起こしたわけではないので憎む気持ちはありませんが、私と同じような目にあう人がないように、自転車に乗る人は十分に注意して運転してもらいたいと思います。

最近自転車と歩いている人がぶつかる事故が多いと聞いていますが、曲がり角や狭い道など、少しでも危ないと思ったら、面倒くさがらずに自転車を降りて注意して通行してもらいたいと思います。

私は歩いて友達に会いに行くことはできませんが、生きていれば、元気でいれば、友達が来てくれて、話し合い、笑うこともできます。家にこもりっぱなしだと3日でぼけてしまうとも聞いています。なるべく足を動かすようにして、不自由な生活の中でも楽しみを見つけて生きていきたいと思っています。私のような被害に遭う人が、一人でも少なくなるように願っています。



交通事故にあつて思うこと

千葉市 80歳 女性

私は、自転車を利用して毎週1回定期的に通院しています。

先日、通院のため自宅近くの道路を自転車に乗って走っていると前のコンビニエンスストアの駐車場から出てきた車とぶつかってしまい、自転車と一緒に道路に転倒して救急車で近くの病院に運ばれてしまいました。

詳しく話しますと、相手の車が、私の10メートル位前の駐車場出口から車の前の方を道路に突き出して止まっていたのですが、見通しが良い場所でしたので、当然車の方が私を見つけて止まってくれるものとそのままのスピードで走っていったのです。するとその車は突然私の方に出てきて自転車の前の部分とぶつかってしまったのです。私はぶつかった衝撃で自転車もろとも道路上に転倒してしまい、一瞬何が起きたのか頭の中が真っ白になってしまい、何が何だか分からず、一人では立ち上がることもできませんでした。そして、手や足がとても痛み、見ると出血して洋服が血で染まっていました。救急車で運ばれた病院の診断では、骨折はなかったものの打撲や擦過傷の怪我を負ってしまったのです。

この事故が原因で手足の関節や腰にしびれがあるため、今は定期的に整形外科に通院してリハビリを受けているのですが、年のせいか痛みはまったく取れず、時にはひどいしびれで体をまったく動かすことができず悩んでおります。

私は昭和一桁生まれで、60年以上も自転車に乗って買い物に行ったり、病院に行ったり重宝に使用していました。今回の事故の数年前には、大型のトラックにあおられた弾みで自転車ごと転んでしまい、このときは「たまたま」と思っていたのですが、今回の事故があったことで、思い返してみると、今では、「若い頃だったらきっと避けることができたのでは？」と思うようになったのです。

家族からは事故を起こす前から「高齢で運動神経が鈍くなっているんだから自転

車はあぶないよ」と言われておりました。私にとっての自転車は、行動半径が広がり、いろいろな体験ができて、楽しくて健康によい乗り物でした。しかし今回の事故で、「また事故にあうことになれば命も危ない。」と思うようになり、もう自転車に乗ることは諦めることにしたのです。

自転車は免許もいらず、子供の頃から乗り出すことができ、大変便利な乗り物です。小さな頃から自転車の交通ルールやマナーを教えてあげることにより、事故は起きないのではないかと思います。私自身は今後自転車に乗ることは諦め、他の交通手段を考えて、家族に迷惑をかけず残り少ない人生を過ごしていきたいと思いません。



自転車事故での教訓

匿名 男性

40代も半ばとなり、職場の健康診断では太り気味（メタボ気味）と診断され、これに追い打ちをかけるように若い頃から苦しめられてきた腰痛も悪化してきたころのときでした。ある友人から「自転車に乗れば腰痛が治るよ」と自転車に乗ることを進められたのです。私は一念発起し家内に頼んで購入資金を出してもらい、近所の自転車屋さんからスポーツ系の自転車を購入したのです。私は子供の頃、初めて親から自転車を買ってもらった時と同じように、心ときめかせながらその日のうちからその自転車に乗り始めたのです。最初のうちは「きつい」と思う面もあったのですが、その反面「きつい」ところを乗り切った後や風を切る快感は何事にも代え難く1週間後には自転車に乗ることにすっかりはまってしまったのです。

そのうち腰痛も無くなって体重も減ってきたことから体調も良くなり、ますますエスカレートしてしまい、通勤で使用したり、土日には1日4時間から5時間、時には百キロ近くも走るようになったのです。そして、自転車に乗り始めてから約2年が経過した頃でした。その日は天気良かったため、いつもは自家用車で通う片道約15キロ先の仕事場に自転車で向かうことにしたのです。午前7時頃自宅を出発して2分位した十字路交差点で、この事故に遭遇したのです。

私の進行する道路は幅4メートルの地元の人しか利用しない急な下り坂の道路であり、交差する道路も幅約3メートルの人と自転車だけでほとんど車は通行しない道路でした。

私はこの交差点は見通しが悪く、交差する道路の両方には一時停止の標識が設置されていることを知っていました。従って、まさか進入してくる自動車や自転車はないものと過信し、いつものように下り坂をブレーキもかけず、速度の乗った状態で通り過ぎようとしたのです。すると、十字路の左側道路から突然自転車に乗った

女子高生が交差点内に入ってきたのです。交差する左側の道路にはコンクリート塀があり、女子高生が来た方から私側の道路は見通しがきかず、一時停止の標識があることも知っていたので、まさかそのまま直進してくるとは、全く予期していませんでした。双方の距離は既に数メートルでありブレーキをかける間も無く交差点内で衝突してしまっただけです。私は前方に一回転し、アスファルトに全身を叩きつけられたのですが振り返るとその女子高生は後頭部を路面に大きく2回叩きつけられ白目をむいた状態で全身をけいれんさせていたのです。私はその状態を見て咄嗟に危険な状態であることを察知し、転倒している状態ですぐに119番通報したのです。その後女子高生に近寄り呼びかけると数分後には意識を取り戻し、到着した救急車で病院に搬送されたのです。私は軽い打撲と擦り傷だけでしたので現場に残り到着した警察官に届け出をした後女子高生が運ばれた病院に向かったのです。病院に着くと既に両親が来ており、怪我は軽い脳挫傷で数日間入院すれば、その後は経過観察の通院で済むということで生命に関わる重傷で無いことが分かり、ある程度はホッとしたのです。

怪我も完治し、その後治療代や自転車等の賠償などの問題が生じたのは当然のことですが、幸いに私は他人に危害を与えた場合の損害賠償責任保険に、また、相手方は、お父さんが入っていた自動車の任意保険の特約に同様の保険があったので、双方円満に示談は成立したのです。

今回遭遇した自転車事故の自分なりの教訓として、

「自転車であっても人を死傷させる危険性のある乗り物であり、自動車と同様に道路交通法を守り、同様の注意をする。」「人を死傷させる乗り物であるから、事故に遭遇した場合の賠償等に対応する保険に加入しておく必要があり、入っていない場合は実費となる。」ということでした。今後は自転車であっても侮ることなく、道路交通法を守り、楽しい自転車ライフを送りたいと思っております。

性善説を信じたい

松戸市 74歳 女性

それは、忘れもしない平成20年4月24日朝の出来事だった。

高校時代の同窓生との一泊旅行に出掛けるべく、折り悪く降りだした雨のなか、折畳み傘を開いてバス停をめざしていた。T字路にさしかかり、さほど広くない道を横切ろうとした瞬間、「ああっ」という男性の声もろとも、私は折畳み人形のよりに路面に倒れ、自転車の少年が心配そうに覗きこんだ。

動転してか、痛みも感じなかったが、立ち上がれず、行きずりの女性が救急車を呼び、少年の連絡先も聞いてくれた。そのまま病院に搬送され、4月28日に手術を受けた。大腿骨の骨折で100日を超える入院生活を余儀なくされた。

加害者の少年が保護者とともに病院に駆け付け、母親とその養父と名乗る人から、一家は生活保護の母子家庭の上母親が重い心臓病の闘病中と聞かされた。

生活は楽ではないが、治療費は分割でも払うので十分治して下さいと懇願され、同情してしまいました。

当方とて老齢の年金生活者で、ゆとりのある生活ではないけれど、将来のある少年を思いやり金銭の要求はしないことを約束した。少年には、過失は過失として忘れず自立したときには、こちらの善意を無駄にせず社会に還元してほしいむね伝え、少年も素直にうなずいた。

入院期間中は少年の母親が毎週のように顔を見せ、その都度テレビが見れるカードを1枚ずつ置いていってくれた。

このようにして、加害者との関係も良好に保たれ、感謝されながら退院の日を迎えることが出来た。

その後厳しいリハビリ通院を続けていたが、平成21年2月11日に軽度ではあったが、脳出血をおこし、またもや2ヶ月間の入院生活を余儀なくされた。運悪く、

怪我をした左側の手足に軽麻痺が生じ、現在も痺れがとれず、歩行もうまく出来ない状態である。交通事故の手術の際に入れた金属も高齢者ということで除去手術は施されず、そのために電気治療を受けられないという不便を被っている。あの少年も来春は高校を卒業するはず、真面目に勉学にはげんでいるだろうか。退院後はなんの連絡もなくすこし淋しく思うこの頃である。

なお、事故の際お世話になった女性の方の住所やお名前も個人情報保護の名目で教えていただけず、お礼も出来ず心苦しく思っている。この場をお借りして厚く御礼申しあげます。



忘れてはいけない。あの日のことを

法田中学校 土屋 那奈

突然、目の前が真っ暗になった。あとのことはよく覚えていない。

私は今年5月に自転車との交通事故にあった。朝、友達と登校中に、後ろから自転車で激突され、そのまま前に倒れた。幸い、首のむち打ちと軽い打撲だけですものの、れっきとした交通事故として警察で処理されることとなった。

左右を確認しなかった私が悪かったのか、それとも、まわりで目撃した生徒いわく、イヤホンをつけ、とても速いスピードで走っていた自転車の人が悪いのか。今となってはもうどっちでもいいが、私は両方悪いと思う。交通事故というのは、普段当たり前のように登校していたり、通学していても起こってしまうものなのだと思った。この事故で、もう一度自分のマナー違反や交通ルールについても見直す機会を得ることができた。

もう一つ思ったのが、経験してみないとわからないものだなあとということだ。

最近、自転車の事故が増えているという話題をよく耳にする。学校でも、全校集会などで

「自転車事故に気を付けよう。」

という呼びかけがされたり、ニュースでは再現ビデオで事故の恐ろしさについて報道したりしている。

しかし、みんな心の底に

「私は事故にあわないだろう。」

という気持ちがあるのだ。

さっき述べたように、普通の生活を送っていても突然事故は起きてしまう。私も実際に事故にあってから交通事故の悲痛さに気がついたぐらいだから

「私には非日常的」

と生きて生活していてもおかしくない。

だったら、いつそのことみんなが事故を経験すれば事故は少なくなるのか。もちろん、そんなわけにはいかない。そこで、実際の事故を体験した私のような人が事故の残酷さを伝えたらどうだろう。身近な人でも、家族でもいい。その体験をきいた人に少しでもわかってもらえて注意するようになればいいなあと思う。

このように、今回の交通事故から学んだことは多かった。逆に事故にちょっとだけ感謝しているくらいだ。私はこの経験を一生忘れないだろう。いや、忘れてはいけない気がする。これからも事故が減っていくように願い続けたい。そう、一人の経験者として。



私の敵

葛飾中学校 坂本 涼夏

「交通事故」この言葉は、私の頭の中に必ず入っている。

私は、小さい頃から交通事故に何回も出遭ってきた。その中でも・・・。

あれは、小学3年生の夏休みの頃のことだった。

「いってくるね」私は、はりきって家のドアを閉めた。母の声を聞こうともせず
に友達と自転車に乗って公園に遊びに行った。

新しい自転車に乗って、遊びに行くのが楽しみだった。

自転車は、スピードを出すと風がビュンビュン当たって気持ちいい。そんなこと
しか頭になかった私は、「飛び出し危険」という看板を無視して、ものすごいスピー
ードで友達についていった。

「キーッ」車の音に反応したけどもう遅かった。横から来た白い車に、自転車の
後ろのタイヤがぶつかって、近くにあったカーブミラーに直撃。頭と足をおもい
つきり打った。

「大丈夫っ？」友達や車に乗っていたおじさん、周りにいた人が心配して集まっ
てきた。

私の頭の中は、真っ白だった。

自転車は、後ろの鉄でできている所に大きな傷が入り、サドルが曲がり、ボロボ
ロ。

自転車に守られた私は、少しのケガですんだ。

すぐに母が心配そうにかけつけた。母は、私の顔を見てほっとした。

その後、私と母は救急車に乗って病院へ行った。ケガは軽い打ち身だった。

何日かたって、あの時のおじさんが私の家までメロンを持って、謝りに来てくれ
た。おじさんには本当に、迷惑をかけてしまった。

私が体験した事故は、普通の事故よりもケガが少なかったのは本当にキセキだと思っている。もしもあそこで、一步間違えていたら、死に近づいていたかもしれない。そう考えると、自転車に乗れない日が何日か続いた。

ある日、友達が「自転車でデパートへ行かない？」と誘ってきた。デパートは、家からとても遠い。自転車が怖い私にはとても無理だった。

そのうち、どんなに近くて安全な道でも、自転車で行くと、あの時の交通事故が印象に残ってしまい、自転車で行くことができなくなってしまった。

それから何ヶ月かたって、私の自転車嫌いは、すっかり消えていた。

どんなに遠い場所も、自転車で行けるようになった。だからといって、あの時の交通事故のことを忘れたわけではない。

どんなに急いでいても、日本の交通ルールを守っていかなければ、命を見捨てることになってしまう。

もし、あの時に、事故が起こっていなかったら、今、起こっていたかもしれない。

「交通事故」その言葉は、私の敵なのだ。



安全？危険！

葛飾中学校 高口 紗英子

「うわぁ！…。」

「キキーッ…」

私はある日、自転車に乗って塾に向かっていて。これが、その時に起きた事の一部始終だ。この時、私は遅刻しそうになり急いでペダルをこいでいた。とてもスピードがでていたのだろう。私はいつもより早く道を進み、いつものカーブを曲がる…が、その時目の前には車が前進し、まっすぐ私の方へ向かっていた。けれど私はペダルをこぐのに必死。

きっと、車の運転手も自転車がいきなり角をまがり、猛スピードで自分の方に向かってきてすごく驚いた事だろう。だがその車の運転手は、私に気づいた時すぐにクラクションを鳴らし、「危険！」と伝えてくれた。

私の方はそれまで全く車に気づいていなかったもので、いきなり前からクラクションのラッパみたいな大きい音が鳴るのに驚き、それまでのスピードと勢いそのままに、「ガッシャーンッ」と大きな音をたてて転倒してしまった。私はまずとっさにその転んだ姿を運転手に見られて恥ずかしい！と思った。

この時に私が転んだのは、勿論私が

「いつもの慣れている道だから大丈夫！」

と軽く思い、油断して、周りを見ずに猛スピードで走っていたからだ。そう。全て私の不注意なのだ。だが、私は思いがけない言葉の耳を疑った。車の運転手はだいたい30～40歳くらいの女の人だった。

私は、絶対その人に怒られるだろうなあと、女の人が車を降りて自分の方へ歩いて来るのを見ながら思っていた。が、その女の人は私のそばに来たとたん、

「大丈夫？怪我は？そんなに足すりむいちゃって…ごめんなさいねえ。」

と言ってくれたのだ。その人は、まず私の心配をしてくれた。たぶん、本気で心配してくれていた。

もし私とその人の立場だったら、きっとものすごく怒っていただろう。だがこの人は違う。そんな事を考えていると、急に自分が恥ずかしくなってきた。だが、転んだ時に感じた恥ずかしさとは似たようで違う。むしろその時自分がまずそうやって、自分の事しか考えなかった事が恥ずかしかった。自分の事しか考えずスピードを出していた事……いろいろなことが恥ずかしく思えた。そして、とても申しわけなく思った。

その後、何度も運転手の人にあやまっていると、冷静になり、さっきの自分の状況をやっと理解し、肝を冷やした。よく見ると、私の乗っていた自転車と、車の距離はとても近く、まさにすれすれの所だった。きっと、あと少しその時の状況が違っていたら、完全に大事故になっていただろう。

私は、この日から自転車が実はとても危険な乗り物だという事に気づいた。そして、もっと注意深く自転車に乗るようになった、きっと、自転車に乗る人、そして車を運転する人が注意深く運転するかしらないかで、それは安全な、また危険な乗り物にもなるだろう。



私の交通安全

葛飾中学校 鴨田 実歩

「いってらっしゃい。気をつけてね。」

この一言は、私が遊びに行くとき、お母さんの言うことです。その時、私は、

「わかってる。」

と言って遊びに行くのですが、あまり気をつけていませんでした。

その日の帰り道、かなり暗くなってから、私は友達の家をでました。なのに、私はライトをつけずに、自転車をこいでいました。しかも、私は目が悪いのに、めがねをかけずにこいでいたので、暗さとぼやけで視覚は最悪でした。そして、運の悪いことに、道はせまくて、段差もあり、となりは、車がビュンビュンと、通り過ぎていく、そんな状態でした。

そんな中走っていると、目の前に突然、草が見えてきて、ぶちあたってしまい、そのせいでバランスをくずし、歩道から車道におちてしまいました。さいわい、ブレーキをふんで、車にはひかれずにすみました。でも、すこしだけ、足をすってしまいました。

それから私は、自分の交通についての行いを思い出してみました。すると、前に何度も何度も危ない思いをしていました。友達とのおしゃべりに夢中になって、車にぶつかりそうになったり、車道を歩いていて、ひかれそうになって、注意されたり、あるときは、ふざけていて、本当に走っている車にぶつかってしまったこともありました。

このように、いろいろ思い返してみると、いろいろ言って心配している母の気持ちもわからずに、すごくたくさん危険で、運が悪ければ、大けがにつながるようなことをたくさんしてきたんだ、ということが、初めてよくわかりました。

ここで私ははじめて反省しました。母や父がどんな気持ちで、

「気をつけてね」

という言葉がいつているかよくわかりました。

これからは、しっかり車に気をつけて、母の言葉を思い出し、安全な運転をしたいと思いました。そして家族に心配をかけないように、事故やけがをしないように、自転車を運転したり、道を歩いたりするときは、気をつけたいと、私は思いました。



活用

葛飾中学校 竹内 祐子

私の姉は何かと注意力が欠けています。

そんな姉は事故にあいました。その日、とても暑く、姉は自転車に乗って信号待ちをしていました。そのときから暑さに意識がもうろうとしていました。信号が青になって進んだ時、反対車線から曲がってきた自動車に気が付かずそのままその車とぶつかってしまいました。姉はぶつかった際、はね飛ばされたらしく打撲というケガをしてしまいました。

その車のドライバーも暑さにボーッとしていたらしく、どちらにしろどっちも注意力が欠けていたということです。

今回は、車とぶつかったのですが、その他にも姉は自転車同士でぶつかった事があるのです。

それは、姉が自転車に乗っていた時、こちらからは見えない角からスピードに乗った小さな男の子が出てきたのです。姉はよける暇もなく衝突し、よく分からないけれど姉の方が吹っ飛ばされるということになりました。

今までの姉の事故で何がかけているかというと、まず、危機感を持っていない。もう一つは、不注意などが考えられます。

理由は、交通安全のために、カーブミラーや看板など安全ために施されているものがたくさんあるのに、それを利用していないからこうゆう事になるんだと思います。

私は例にあげたように、カーブミラーを自転車に乗っている時、よく見ます。私も少し前まではカーブミラーをあまり使っていませんでした。しかし、前にカーブミラーを見ないで曲がろうとしたら、勢いにのった自転車とぶつかりそうになったのです。私はあの時ほど身の危険を感じたことがありませんでした。多分そういう

体験をした人は大勢いると思います。実際に危ない目に遭わなければ、危機感を持たないと思うけど、そのような体験をせずに、一時も注意力を欠かせないようになればいいと思います。そのためにもみんなが安全に気を配り、交通安全で施されているものをちゃんと利用し、また、もっともっといろいろな物を作って、みんなの安全ために頑張ってください。



無題（スクーターとぶつかった事故について）

匿名 26歳 男性

今回の事故は私の不注意から起きました。

事故の後、私は自分の身体が軽傷で済んだ事の安堵や事故の相手方に対する謝罪や心配、家族に迷惑をかけた事、職場を空ける申し訳なさ等色々な気持ちを満足に動けない身体の中で抱えています。

事故の当日は仕事が休みで日中は走ったりジムで身体を鍛えたりして過ごし、事故の起きた夜の7時頃には相当疲れていて、その状態で自転車に乗りました。事故現場の道は家から近く、通勤で毎日通る場所でもあり、今考えるとそんなところに見えない油断が既に生じていたのかも知れません。いつもと同じ様に自転車を走らせ事故現場となる右折場所まで来ました。暗がりの中、車のライトの明かりが無かったので今日はやけに車の通りが少ないなと思いながら右折場所の横断する道路の先と、この時には確認したつもりで、右折のために車道を横断しました。私の意識の中では、横断が終わり右折先の前方に気を付けながら自転車を漕いだ時に、真横から眩しい光ともの凄い衝撃が私に向かって来ました。

飛んでいる感覚の後にアスファルトに叩きつけられました。幸いに頭を打つこともなく、倒れた直後も意識はしっかりとしていました。

私よりはるか前方に倒れている相手の女性と乗っていたであろうスクーターを見て、大丈夫だろうかと考えました。

その後、通行人が通報をしてくれ、病院に運ばれ、怪我は鎖骨の骨折と全身のいたる所に打撲をただけで済み、相手の方も特に大事に至らなかったとのことなので良かったと思っています。

事故の後の現場検証で自分の普段の運転のつもりや、だろうといったあやふやな判断がどれだけ危険だったのか実感しました。

今回の事故が軽傷で済み、道路での危険や自分の責任を学ぶことができました。しかし、もし頭でも打っていたらと考えると本当に恐ろしいです。道路での安全確認は誰でも出来ることなので、こうした事故体験から始めるのではなく、痛い思いをする前にやっていたら良いと私は思います。



自転車事故を起こしての反省

匿名 女性

私は高校時代、田舎道での自転車通学だった。自転車に乗ることには自信があった。雨の日は左手で傘をさし、右手でハンドルをにぎり、スピードをあげて走っていた。

そのおごりの心がいけなかったと交通事故を起こしてから気づき、初めて深く反省した。

私の事故は見通しの悪い裏道の交差点での出会い頭の自転車同士の衝突であった。

相手の方は、若いお母さんで後ろに幼稚園のお子様を乗せ猛スピードで交差点に入って来た。一方私はゆっくりと交差点に左右の安全も確認せず進入し、そこで自転車同士の衝突。

その衝撃で私だけが倒れ、自分の自転車の下敷きになった。すぐ立ち上がろうとしたが立ち上がれなかった。相手のお母さんがすぐ119番してくださり救急車で病院に搬送してくれた。診断の結果、右下肢骨折とのこと。

即入院、入院70日、退院後6ヶ月間自宅近くの病院で通院リハビリを行う。

現在、事故以来約3年余りが経過しているが、毎日の生活には特に不都合は感じないが金属が下肢に入っているので多少の不安はある。外国旅行の際、空港でのセキュリティでは必ずチェックされる。

相手の方は、よく病院にもお見舞いに来てくださり、心を尽くしてくれました。

事故は、示談で済ませた。

この事故以来、現在でも私は毎日、自転車を愛用している。しかし自転車に乗る時の心構えは依然と全く違っている。現在の自転車に乗る時の心構えの幾つかを挙げてみる。

- 1 スピードを出さない、自転車の整備の確認をする。
- 2 信号を守り、横断歩道以外は決して渡らない。
- 3 少しでも危険を感じたら、自転車から降り、自転車をひいて歩く。
- 4 見通しの悪い信号の無い交差点では、一旦止まり、必ず左右の安全の確認をする。
- 5 話しながらの運転、脇見運転、携帯電話をかけながらの運転はしない。

行政に対しての願いは、自転車専用道路を一部分でもよいので早く作ってほしい。

または、歩道を広くして欲しい。歩道の舗装にも歩きやすい、自転車にも走りやすいよう気を配って貰いたい。

歩道の真ん中に電柱が立っていることもあり歩行者や自転車の人に大変危険である。

交差点などでの見通しを悪くしている高いブロック塀や丈の高い植木の囲いの解消にも考慮していただきたい。

自転車は「道路交通法」では本来車道を走るのが原則と聞いたが車道は自動車が我がもの顔で走っているので、自転車での走行は危険極まりない。私は違法と知りながら歩道を走らせてもらっている。心の中にいつもしっくりこないものを感じているこのごろです。



自転車事故体験記

52歳 女性

私の場合は、自転車の自己転倒という情けない話ですが、油断大敵、雨ではなくて、雪道での体験を恥ずかしながら綴りたいと思います。今年最初の積雪、前夜から降り始めた雪はやみ、ジャリジャリ、ゴツゴツのアイスバーン。

自宅から駅、電車を乗り継ぎ、駅から職場と自転車を使用时、朝の忙しい時間を1分でも短縮しようと通勤していましたが、さすがにその朝は、自宅から駅まで、自転車を断念して運動靴で、恐る恐る、一步一步転ばぬように歩いて、無事到着したのです。寒さと、緊張で、強張った体をほぐしながらラッシュの電車で、目的駅へ向かいました。車窓から眺める銀世界はとてもすばらしい幻想の世界など思いましたが、現実には、後ろから押され、ドアとの間に挟まれ苦しい思いをしながら、職場の最寄り駅であるJR本八幡駅に到着したのです。駅を出て歩き始めると、スイスイと駐輪場に向かって来る自転車。あれえ～？これなら私も大丈夫かしらと、多めに勘違い。あれこれ思案したあげく、帰宅時を考えると、「雪は解けているだろうし、一本でも早い電車に乗るには、自転車で行った方が楽だろう。」と思い駐輪場に向かいいざ出勤。

私なりに考えたあげく、裏通りは日当たりも良くないし、車も通らないからまだまだ雪は解けていないはず、それならば、車の通りの多い道へと思い、いざ駐輪場を出発。慎重に、自転車をこぎながら、やっぱり思ったとおり、裏通りと比べ雪はかなり解けており道路の左側を順調にスピードを上げた途端。目の前にシャーベット状の大きな水溜まり、慌ててハンドルを切りながらブレーキ。

ひとたまりもありません。

自転車と共に自分の体が右に傾きながら後輪が浮き上がり、ワァーと思いながらも、頭を打ったら大変なことになるからそれはまずい等と頭をよぎっているうちに水

溜まりに、自転車ごとスライディング、地面に思いっきり右膝を打ちつけ、左足が重く動かない、後方から車のブレーキ音、もうダメ～、もうダメ～ヤダ～と！

でも聞こえてきたのは優しい男性の声。

「大丈夫ですか。怪我はないですか。すみません。左足が動かないのですが。」と言ってから自分の左足を恐る恐る見ると、ペダルと自転車の間に挟まっているだけ、男性がペダルを少し回してくれた途端左足はするつと抜けて、いざ立ち上がろうとしたところ、右足がズキ～んあれれいやな痛み、男性にお礼を言って謝って、しばらく自転車を押して歩いてみた、痛いけど歩けるのではないかと、今度は恐る恐る自転車にまたがり、ペダルをこいでみたら大変、とても耐えられず押して歩くしかなく、かなり腫れ上がり亀戸大根が、三浦大根ほどに、結局は、右膝蓋骨複雑骨折、簡単に言えば膝の皿を割ってしまい、その結果、仕事に穴を開けるは、私生活にも支障をきたすわで、金銭的にも身体的にも、10ヶ月経った今でも大変な思いをしています。雪道で自転車を乗ったこと事態が、そもそもの誤りであったとは思いますが、少しスピードを出しただけで、目前の水溜まりを見つけることが出来ず、急ブレーキ、急ハンドルによって、バランスを崩し、大転倒。

自転車も自動車と同じで、すぐには止まれないことはわかっていたつもりなのですが、あの時、後方を走行し、良く止まることが出来て私を助けてくれた運転手さんには、本当に感謝しています。一歩間違えば、事故の当事者になりかねなかったのですから、自分の不注意によって多くの人々に迷惑をかけたこと、そして二度と痛い思いはしたくないとつくづく反省しています。

今回の事故は、自分が痛い思いをただで第三者に怪我等をさせなかったことが不幸中の幸いであったと痛感しています。高齢の方などを巻き込んでいたらと思うと考ただけで背筋が「ゾッ」とします。

「急がば回れ。」という事故を身をもって体験した瞬間でした。

ごめんね、お母さん

千葉市 18歳 男性

僕は、昨年の10月ころ、T市内の交差点付近で自転車に乗っていて前から走ってきたトラックとぶつかる交通事故に遭いました。そしてたまたま近くにいたおばさんが、救急車を呼んでくれたり、お母さんに連絡してくれました。この事故で僕は肺に穴が開くという大怪我をしてしまったのです。

この日は、学校が終わって、自転車に乗り近所のスーパーに買い物に行こうとしていました。天気は晴れていて、道路はバスが通る通りで広くもなく狭くもないところでした。道路両側は狭い歩道があり、人が歩くのがやっとで、自転車が走れるような歩道ではありませんでした。自転車は左側通行ということは学校でやった安全教室で教わり知っていましたが、右折するのに右側を走った方がその先で曲がるのに都合が良かったので、そのまま道路の右側を走ってしまいました。

そして国道14号の交差点付近まで来たとき、対向して来るトラックとぶつかってしまったのです。事故直前、僕は、トラックから逃げようと歩道に入ろうとしたのですが、自転車のペダルが車道の段差部分にぶつかり、僕は道路側に倒れてしまい走ってきたトラックのバックミラーに僕の胸がぶつかったのです。一瞬息が止まりました。そして道路にたたきつけられました。息も出来ず、すごく苦しい時間でした。我に返るとトラックの運転手のおじさんと、知らないおばさんが僕を起こそうとしていました。僕は息苦しくやっとのことで呼吸をしていました。

その後、だんだん落ち着いてきて、おばさんが

「救急車呼んだよ、家の電話いくつ。」

と僕に話しかけてきました。道路の端で座って休んでいると救急車の音がだんだん近づいてきて僕の前で止まり、そのまま救急車に乗せられました。少しして母が救急車に乗り込んできて

「大丈夫、どうしたの。」

と青ざめた顔をして声を掛けてきましたが、僕は、

「ごめん、お母さん。心配かけて。」

と救急隊の人に聞こえないように謝っていました。病院のレントゲンで診てもらったところ肺に穴が開いていることがわかりました。しかし、病院に入院することなく2、3回の通院で終わり、今は普通に生活しています。あの時、救急車に乗り込んできたお母さんの顔を思い出すたび、

「ごめん、お母さん。」

と心の中で謝ってます。

もう少し早く倒れていたらと思うとぞうっとします。恐らく車の下敷きになってとんでもないことになっていたと思います。

この事故を期に僕は道路の左側を走ることを守っています。また前をよく見て車や歩行者などに気をつけて走っています。自転車は便利な乗り物ですが、一つ間違えば非常に危険な乗り物だと思います。今後はルールを守って交通安全に心がけます。



交通事故の教訓

習志野市 女性

その日、私はアルバイトに行くため自宅の団地を出たのです。時間は朝7時ころです。団地の階段を降りて、すぐの歩道に出たとき、左から突然自転車が走ってきて私とぶつかりました。ガシャーンという音の後、私は道路に倒れました。

すると「大丈夫」と自転車に乗っていた相手の人が声を掛けてくれました。相手の人は、60歳くらいの男の人で、私が「足と腰が痛いです。」と答えるとすぐに救急車を呼んでくれました。実際、そのとき、私は痛みで一人では立つこともできなかつたのです。その後、男の人は私に連絡先を書いた紙を渡して、「わたしはジムに行くため急いでいて、あなたにぶつかってしまいました。すいません、今後、何かあればすぐに連絡を下さい。」と言ってくれました。

私はN病院に救急車で運ばれましたが、傷は幸いにも軽く、腰と左足の打撲で済んだのです。診療が終わって病院のロビーにいと、警察官がきて、相手の人がこの事故の届け出をしてくれたのだと分かりました。

この事故で私は、アルバイトを3日ほど休みましたが、診療代等は相手の入っていたスポーツ保険というもので支払ってもらいました。スポーツ保険というものは、私も今回の事故で初めて知ったのですが、スポーツをよくする人が入ることの出来る保険で今回のようなジムに向かう途中のケースでも使うことができたのです。

幸いにも私の事故の相手の方は、良い方で親切に事故後も対応してくれました。今、私自身で今回の事故の事を思い返してみると、家を出てから早くアルバイトに行こうと考えていて、歩道に出るときに左右から自転車が来ていないか安全確認を十分にしていませんでした。私自身、二度と交通事故に遭わないために、よく反省をしなければいけないと思います。

朝は余裕を持って安全第一

君津市 16歳 男性

僕は、いつもの時間に慌てることなく家を出て、いつも通学している道を自転車で学校へ向かいました。

左側は127号線の2車線の道路でした。

そのとき、右から127号線に左折しようとする車が目に入りましたが、一時停止をしてくれると思い、そのまま自転車で車の前を通り抜けようと思ったところ、車の方は右側だけを見て一時停止することなく左折しようとしたため、僕に気がつかず、「あっ」と思った瞬間127号線の道路に突き飛ばされました。

幸い頭などは打たなかったので、すぐに起き上がりました。右足の^{くるぶし}踝の内側を深く擦りむいた程度でしたが、それだけでも一瞬頭が真っ白になり事故の怖さを実感しました。車の方は、僕を心配してくれ、すぐに警察に連絡してくれました。

僕の親は、この事故で、大した怪我でなくよかったと言いましたが、一瞬を間違っていたら大事故になっていただろうという事を想像して、そうなったらどうするか、家族でたくさん話し合いました。

家族で事故の恐ろしさを話し合うことで、自転車の乗り方に気をつけるようになりました。また、相手の立場になった時、一時停止、左右確認を必ず行いスピードを出さないようにする事も話しました。

事故にあってからわかる様ではいけない事ですが、車に乗る時は、気を引き締めて安全第一でお願いしたいと思います。



通り慣れた道だけど

いすみ市 佐藤 昭子 68歳

私は自転車店の妻です。自転車の扱いは誰よりも知っているはずでした。そんな私ですが今年の2月の朝、自転車に乗っている時に転倒して入院したのです。

その日は、近所の旅館にパートで働きに行くことになっていました。朝6時半ころです。交差点を左に曲がろうとして自転車のハンドルを切った途端、「ストン」と左側を下にして倒れてしまったのです。通り慣れた道ですが、よく見るとその日に限って道路が凍っています。周りには誰もいません。車が来ると危ないので、やっとの思いで立ち上がると左肘が痺れパンパンに腫れてきたのです。我慢してその日は仕事をしましたが、どうしても痛いので病院で診察を受けたところ骨折しており、そのまま手術を受けて10日間入院しました。

事故からもうすぐ1年になりますが、肘には骨を固定する金具が未だに入っています。肘を着くと今でも痛みますし、肘を伸ばすこともできません。あの日以来、自転車には怖くて乗れなくなりました。近所に買い物に行くにも夫に車で送り迎えをしてもらうので、夫の負担になっています。

入院や治療費は、パート先の労災保険と市の自転車傷害保険に加入していたので支払うことができました。残念なのは店で取り扱っていた「TSマーク」に入っていなかったことです。

今思うことは、もし転倒して頭を打っていたならば、もっと大怪我をしていたかもしれないということです。ヘルメットを被っていたら良かったと思います。近くの中学校の生徒は自転車で通学する場合、全員がヘルメットを被っています。私たち年配者にも軽くて丈夫でお洒落な自転車用のヘルメットがあれば中学生のように皆被るのではないのでしょうか。

また、自転車の点検はきちんとしておいた方が良いとも思います。お店にパンク

修理に訪れるお客さんの自転車を見るとチェーンが伸びきったものが多く、大変危険です。修理を勧めても「費用が掛かるから。」と言って断られます。「私のように怪我をしてからでは遅いのに。」といつも思います。

私は実際に怪我をしてみて「自転車も運転を誤れば、大怪我をするんだ。命を預けている乗り物なんだ。」ということが良く分かりました。今はまだ怖くて自転車に乗れませんが、再び乗れるようになれば、車と同じように点検や保険やヘルメットを忘れないようにしたいと思っています。そして通り慣れた道でも油断することなく交通事故に注意したいと思っています。



交通事故を体験して

15歳 女性

私は、高校1年生で学校には自転車で登校しています。先日、いつもの通学路で事故に遭ってしまいました。十字路での車と自転車の衝突事故でした。幸い私の怪我は打撲で済み、相手にも怪我はありませんでした。その日は、いつも車に注意しながら渡っている十字路を、急いでいたため軽くしか確認せずに渡ってしまいました。その事故のせいで警察の方や救急隊の方、相手の方、親、先生、友達など、すごく沢山の人の迷惑や心配をかけてしまいました。

私は、自分が事故に遭うなど思ってもみませんでした。いつもの注意を怠った事によって事故が起こってしまったことを、今はすごく後悔しています。もし、車のスピードがすごく出ていたら、命を落としていたと思います。事故は人の命に関わる事なので本当に気をつけなければならないと感じました。

私は、この事故に遭ってから、自転車を注意しながら運転するようになりました。この事故に遭う前までは

「まさか自分が事故に遭うことはないだろう」

と少し注意も甘かったと思います。しかし、私は事故に遭ってみて、事故の恐ろしさを知り、前よりも深く注意するようになりました。事故の後、親や先生や友達に

「生きてて良かった」

と言われました。

本当に、交通事故はどこでも起きるし、自転車は特に命を落とすリスクが高いので、小さな怪我で済んで良かったと思いました。自転車に乗っている人も、車に乗っている人も、お互いが注意しながら運転すれば、交通事故はすごく減ると思います。

私は、これからもずっと体験した事故のことを忘れないと思います。事故は起き

てしまってからではどうしようもないけれど、防ぐ事は出来ると思います。私は、人が命を落としてしまってからでは遅いので、一人一人が事故を身近に感じながら通学や下校をしなければならぬと、事故を通して感じました。

この事故を通して学んだ事や反省を生かして、これから登下校に限らず、自転車に乗るときや、車に乗るようになったときに、もう二度と事故を起こさないように気をつけていきたいと思っています。



無題（軽自動車とぶつかった事故について）

君津市 61歳 女性

私は、ある日の昼間、近所のスーパー銭湯に自転車で出かけた時、横断歩道を信号機の青色表示に従って自転車で渡っていたところ、右折してきた軽自動車にはねられ、自転車とともに転倒し、右手に4週間の怪我を負う事故に遭いました。

この事故で私は、救急車で木更津市内の病院に運ばれ、右手関節部挫傷などで、4週間の診断を受けました。事故による怪我のため、事故に遭う前は当たり前のようできていた家事が思うようにできなくなり、今現在も、とても不自由な生活をしています。事故に遭う前は、何の不自由もなく、当たり前のようやっていた家事や生活が、ほんの一瞬の事故による怪我でできなくなり、普段の健康や安全のありがたさを痛感しているところです。また、この怪我で、足の擦り傷が痛く、お風呂にも満足に入れない状態です。幸いにして命に別状がなかったことだけが唯一の救いでした。

車を運転していた相手の方は、事故の当時から私に真摯に謝ってくれており、反省もしているようなので、相手方個人に対しては特に思うことはありませんが、この事故を通じて一つだけ思うことは、

「相手の方(運転手)は、どうして横断歩道を自転車で渡っていた私に気がつかなかったのだらう」

ということです。何か考えごとをしていたり、安全確認ができなかった理由があると思います。

私は、あのと時の事故のことが恐怖心として心に残ってしまい、事故後も横断歩道を渡っていると「また、車が急に来てぶつけられるのではないか」という恐怖を覚え、横断歩道を渡るのが怖くなってしまいました。

交通事故は、このように身体的な不自由だけでなく、精神的な苦痛も多く、何一

つ良いことはありません。この事故を担当してくれた警察の方から、君津警察署の管内では事故の発生件数や事故によって怪我をされている方が昨年に比べて増えていると聞きました。

また、この手記の話をいただいた時、千葉県内では、自転車乗車中に交通事故の被害に遭い亡くなっている方も沢山いると聞きました。

車を運転する方は当然ですが、ハンドルを握っているときは、交通ルールを守り、安全確認をしっかりと、事故のないようにしてもらいたいと思います。それと、私を含め自転車を運転する側も、自転車のマナーや交通ルールをしっかりと守り、事故に遭わないようにしてもらいたいと思います。

みんなが気をつけて事故のない街にできたらと思います。



こんなハズじゃ、なかった

市川市 51歳 女性

それは、真夏の夜の一瞬の出来事だった。

ガッシャーン・痛い～、私は路上に投げ出されて腰を打ち、買い物をした食料・雑貨品類は路上に散乱し、乗っていたピンクの愛車であるママチャリもその場で倒れ、後輪がカラカラと空回りしている。アルバイト先に行くにも、習い事・買い物に行くにも、小回りが聞いて便利な乗り物、私のママチャリである。

私は下町生まれ育ちの活発なチャキチャキの江戸っ子ムスメ。

実家は駅の側にあり、生活に必要な買い物は歩きの移動でこと足りて、自動車は勿論、自転車も必要のない生活でした。自転車に乗り始めたのは、主人と結婚して市川に住み始めた20数年前のことで、主人に教わってのことでした。若い頃、リズムカルでバランス感覚が求められるポップス系のダンスを習っていた私にとって、自転車を乗り回すのにさほど時間は掛かりませんでした。それ以来ベテラン自転車利用者です。自転車は勿論、自分の力で走るエコな乗り物で、走り始めの最初が一番力が入り、膝に負担がかかることから、サドルを私は普通よりも高く設定し、足の先が一寸立てる程度にして乗っていました。ペダルを漕ぐのにその方が膝に負担が掛からず、走り出したら惰性で走らせ、交差点などでも止まらずにいつも走っていた。この日は、晴れており暑い夜でした。子育ても終わり、夫婦二人の生活をしている私は、アルバイトを終え買い物をして若い時に習っていたポップス系ダンスをスポーツクラブで習い、心地よくかいた汗をシャワーで流し、若いころの様にルンルン気分で、愛車にまたがり、暗い夜道を家路に急いだ。

時計の針はもうすぐ午後10時を過ぎようとしていた。いつもより遅くなったけれど、いつも遅い主人よりは先に帰宅したいと思いながら走らせた。交通量は少なく、ダンスで使った赤いハイヒールでペダルを漕ぎ、ライトを点けてスーイスイと

テンポ良く走らせていた。表通りから、住宅地の裏通りに入りあの十字路を右折すると数軒先が我が家、電気が点いていれば主人が帰宅していることになる。

十字路に一気に入り、右にハンドルを切る、一番先に我が家を見ると電気が点いている。“まずい”遅かった。と思い、ペダルに力を入れた途端、上り傾斜になっていたことと前カゴに重い荷物を積んでいたことから、バランスが大きく崩れ、直そうにも直らず。オッ、何の何のここはいつもの様にヒラリと右足を路面に着地させて支えれば転倒を防げる、と気持ちはしっかりしていたが、ハイヒールで着地を失敗。あっ、ベキッ、ドスン、ガシャーン、痛たあ〜い、やっちゃった〜。

まったく自分の意に反した結果だった。痛さを堪えながらも、初めに周りを見渡す。かっこ悪い姿を、近所の人に見せたくない。周りには誰も居ない。痛いけど良かった。お気に入り履いていた、赤色エナメル質のハイヒールは足から脱げ、ギザギザに傷が付いて光を失い転がっていた。もう履けない、あ〜ショックと、思いながらも立ち上がろうとしたが、あまりの痛さに立ち上がれず、良く見ると肘・膝からも血が出ている。こんなハズじゃ無かったと、本当は自分が一番知っている。

『いつまでもあるとおもうな若さと美貌』

不便なギブス生活を2ヶ月も続け、自宅から50メートルの現場にいち早く駆けつけて病院に救急搬送してくれた夫に、一番迷惑をかけたと反省している。

今は、荷物は後部のカゴに入れ、ハイヒールで運転するのは辞め、サドルを少し下げて、止まるべきところでは止まり、安全運転に心掛けています。治療費は、スポーツクラブで1年毎の加入を勧められた『スポーツ保険』に加入しており、治療費や交通費などが支給され本当に助かった。今回は、独りだけの転倒として終わったが、自転車保険として、相手に対して支払うTS保険があると聞いた。こんなハズじゃなかった、の為に保険には加入すべきだなと本当に感じた、真夏の夜の一瞬の出来事だった。

交通事故にかかわってしまった

君津市 60歳 女性

白い壁、狭い部屋の中で、目をあけた私。「ここは、どこなんだ、なぜ、ベッドの上にいるのだ」周りを見渡すと、娘がいた。ずっとつきっきりで付き添っていたようだ。私は4日間意識がなくベッドに寝ていたとの事。

平成20年4月7日の事故から、今日までの事を娘から聞いた。私は事故の事、一切記憶に無い。仕事先から、主人に連絡があり、主人から子ども達に連絡が入り、皆が病院に集合し、この4日間それぞれが心配して過ごしていた事。年老いた私の両親も毎日毎日、病室に来て意識が戻るのを待ち望んでいた事。

意識が戻った私に、担当医師が病状を説明、「脳挫傷・くも膜下出血」

3ヶ月の診断書が提出された。診断書に書かれている文字に、ただボーッとしてしまった。

死亡率の高い病名、今後おこりうる後遺症についても、一応説明を受けた。

次の日からリハビリが始まった。歩行のリハビリ等を行い階段の散歩等も実施した。

医師から「どうしても壁に体を付けて歩いています」と言われていた。無意識に体を壁につけて歩いているようだ。

1ヶ月半で退院し、今後は通院をすることとなった。しばらくは、部屋にこもりきりですぐにソファーに横になってしまう。疲れる、何もしたくない、只一点をみつめている日々を過ごしていた。

事故は、なぜおきたのか。

私は6時頃自分の車を移動するため、道路を徒歩で横断していました。

小雨が降っていた。少し暗くなってきていた。

相手の自転車は無灯火だった。(加害者)

私も横断歩道を渡っていなかった。(被害者)

道路を渡ろうとしている私に気づいた相手は、急ブレーキをかけてすべり、自転車のタイヤが私をさらって、私は頭から倒れてしまったことによる事故でした。

自分たちのちょっとした過ちが招いた事故でした。私が横断歩道を渡っていたら、自転車がライトを点灯していたら、この事故は避けることが出来たのではないのでしょうか。

幸いにも、医師から言われた後遺症運動機能障害・知的障害・下半身マヒ・失語症・てんかんは1年半経っても出ませんでした。

医師も、「本当に良かった。何の変化も無い生活をしているけれども、貴女は本当に脳挫傷だったんですよ！」レントゲンでもはっきりその跡が残っていました。

通院は1年半通い、今現在は保険会社との話し合いに入っています。事故発生からたくさん書類提出、これでもかという位の書類でした。

今こうして日常生活が出来るのも、そのとき携わっていただいた方々、そして家族、仕事先では3ヶ月もの間私の分まで仕事をこなしていただいた同僚たちの暖かい支えがあったからです。

退院した後、交通事故自体の恐怖は無かったが、自動車に乗るだけで、体がだるく疲れが出てすぐに横になってしまう日々であったし、当時は自転車に乗るのを家族に止められ、また、一人での出歩きも禁止状態でした。

私を含め自転車を運転する人は、交通ルールを守り安全運転・いつでも止まれる体制で運転をして無理な運転はしないで欲しい。時々携帯電話を見ながら又ヘッドホンをしながら運転している人を見かける、危機意識が薄い、何時何が起きるかわからない。絶対にやめて欲しい。自転車のタイヤがあたっただけでも、全治3ヶ月という事になってしまう。また、このごろは自転車事故も多いことから、保険加入の義務付けを制度化してほしいと思います。

事故の瞬間で人生が変わった父

角田 慶治 62歳

3月18日の3時過ぎに私の電話に父の事故の知らせが入り、すぐに搬送先である旭中央病院へ向かうと、脳外科で治療中でした。

担当の医師の話によると脳挫傷ということで、手足も打撲で青くなっておりました。

それからは、私と妻と二人、病院通いが15日ぐらい続き、父が痛がっている姿を見ているのも辛く大変な思いをしました。

加害者はA病院の研修医で、事故の当日に謝りに来たのですが、誠意は何も感じられない謝り方でした。医師として、人間として、命の大切さが分かっていない様でした。

事故の状況は、父が横断歩道を自転車で渡る途中、旭方面から来た加害者の車に接触し、頭を強打して倒れ、手足も打撲しました。全くの加害者の前方不注意との事でした。

補償問題もなかなか思うように決まらず、月日がばかりが経つ毎日。病院の手続き、市役所の手続き、警察署の事情聴取で大変忙しい思いもしました。身も心もくたくたになりました。

交通事故は、自動車の運転の仕方によって防げます。現在の気持ちは、交通事故に遭った家族当事者は、経済的にも、身体的にも大変な思いをして、一生忘れられません。

父は残りの人生を病院で送ると思います。
家族として一生辛さだけが残されます。



息子の事故

横芝光町 70歳 女性

平成22年4月22日夜に突然警察から連絡がありました。息子が事故でけがをし、旭中央病院に救急車で運ばれたということで、とてもビックリし急いで病院に向かいました。

病院に着いて、顔を見たら大怪我を負っていて再びビックリしました。

医師からは、「命が危ない。」と言われ全身の力は抜け、あの時の気持ちは今でも忘れることが出来ません。

幸いにも1ヶ月の入院で済みましたが、相手の方は無免許で更にお酒まで飲んで運転していたとうかがいました。

事故の日の朝、元気に自転車で仕事に行った息子の平穏な日々を奪った相手が許せない。

息子は事故後、頭痛が続いており、今でも苦しんでいます。

相手の方は、私の家の近くに住んでいて兄弟や家族もいるらしいのですが、一度たりとも謝罪に来たことがありません。治療費も50万円以上かかっていますが支払いはされず、老後のため大切に蓄えておいた貯金から支払い、生活がとても苦しくなっていました。

私と事故に遭った息子には、苦しみと悔しさだけが残りました。出来ることなら事故の前の生活に戻して欲しい。相手の方には、もう二度と運転はして貰いたくないと強く願っています。



息子に起きた事故

匠瑛市 36歳 女性

私の息子は、小学5年生です。夏休みに入ってすぐ自転車に乗っていて車と接触する事故に遭いました。場所は自宅のすぐ近くの押しボタン式信号がある横断歩道です。

息子には携帯電話を持たせていたので息子本人から

「車にはねられた。」

と、直接電話がかかって来ました。パニックになりながらも昼寝をしていた下の子を連れ急いで現場に向かいました。その日は小雨が降っており、私は事故に遭ったばかりで顔を真っ青にししながら震えている息子に、

「だから雨の日は遊びに行くなって言っているでしょ」

と、叱ってしまった事を今でも後悔しています。意識があり、しっかりしていた安心感と軽いパニックで言ってしまった言葉です。そのまますぐに救急車に乗せられ病院へ向かいました。救急車の中で息子は

「腰が痛い。」

と何度も叫んでいました。そんな姿を一緒に見ていた下の子が涙を流して不安な顔をしていた事が今でも忘れられません。相手の方がどんな方なのか、よく知らないまま検査を受けました。夏休み中にも関わらず事情を知った担任の先生は病院へ駆けつけてくれました。でも相手の方は病院へ来ることもなく連絡一つありませんでした。

検査の結果、幸い大したこともなくひどい打撲で済みました。事故後1週間位は一人で歩けず、夢で何度もうなされ目が覚めてしまう日々が続きました。その後相手の方から連絡があり、家に謝りに来ました。その時の相手の車を自分で運転してきた事にびっくりしながらも事故の話を知りました。その方は、

「前しか見ていなかった。」

と、何度も言っています。私は、納得がいかず

「前しか見ていなかったらぶつかるはずがない。」

と言い返しました。私自身、車を運転するので自分にも起きるかも知れないことなので責めるつもりは無かったのですが、あまりにも言い訳ばかりするので、カッとなってしまいました。

後で目撃者の方の話を聞くと息子は押しボタンを押して青になってから渡っていたと聞きました。相手の方は車道の信号が赤で前しか見ていなかったにも関わらずブレーキをかけた形跡も無かった、お宅の息子さんは悪くない。と証言していただきました。相手の方はぶつかった後、車から降りて自分の車の心配をしていた事も聞きました。許せません。

警察の方からも連絡を頂き、うちの息子は被害者です。と言われた時は本当に安心しました。息子は生まれつき心臓に病気があるため、事故の怪我も心配でしたが持病の方も心配でなりませんでした。楽しいはずの夏休みが事故のせいで何一つ楽しい思い出も作れませんでした。今では学校に元気に言っていますが事故後一度も自転車に乗れていません。

まだ、怖いと言っています。車を運転する方、自転車に乗る方、その他の方々みなさんが交通ルールをしっかりと守っていれば事故は防げると思っています。悲しい思いをしない様、みなさんで心掛けて頂ければ幸いです。



最悪な夏休み

匠瑛市 14歳 男性

僕は職業体験の打合せに友達と自転車で行きました。打合せが終わって友達を家の近くまで送り、自分も家に帰る途中、いつも通り慣れた十字路、早く家に帰りたかったため気持ちが焦って横から来た車とぶつかってしまいました。

そして、気が付くと田んぼに落ちていました。隣には誰だか分からないおばさんが口元にタオルを置いてくれていました。その方は僕に救急車を呼んだからと言い、ずっと僕の横にいてくれました。僕の足はしびれて動かそうとしても動かず、頭に手を当てると手に血が付き、口の中も鉄の味がしました。

救急車で旭中央病院に運ばれ、少しするとお母さんが来て、僕はほっとしました。

検査があり、その結果足が折れていると言われ、その日は入院をして翌日松葉杖と車イスを使い退院しました。

松葉杖が上手に使えず、家の玄関に入ることが出来ず辛かったです。足のすり傷から透明の液が出てしょうがなかった。

夜、トイレに行くのは危ないからと尿器でおしっこをしていました。お風呂もせまいので痛い足をぶついたり。夏休みの毎日がベッドの上での生活となってしまいました。

楽しみにしていた職業体験もできず、僕にとって最悪な中学2年の夏休みです。

これからは絶対に事故にあわないよう、気をつけたいと思います。



「良い教訓」

70歳 女性

私は平成21年11月上旬頃、自転車を運転中にひき逃げ事故に遭い右の鎖骨を骨折する怪我を負いました。

この日は稽古事に向かうため自転車で向かっていると、急に白い車が私の方に右折してきたのです。危ないと思った瞬間、良くテレビで見るように周りがスローモーションになり、避ける間もなくぶつかって道路上に自転車と共に転倒してしまいました。道路に倒れている私を置き去りに相手の車は逃げ出してしまったのですが、幸いにも相手の車はすぐに捕まりました。今回ひき逃げ事故というひどい事故にあった訳ですが、現在怪我也も治った私にとっては非常に良い教訓になりました。

一つは、私は車の運転もしていたことから、車も運転出来るし自転車も大丈夫と自転車の運転にも自信を持っていました。しかし、今回の事故を機に自分は年だということを自覚して、自転車を運転するときなどはより慎重になりました。

もう一つは、自宅には車が1台あったのですが、夫と相談してお互い高齢ということもあり、次は事故を起こしてしまっは大変だと考え、思い切って車を手放したのです。また相手に対しては、当初は事故を認めていないと聞きずいぶん憤慨したのですが、現在は私も歳だからでしょうか、この不況で仕事も無くなってしまうだろうとか、事故後相手の方のお母さんから留守番電話に「息子をご迷惑をかけて申し訳ない」と謝りの電話が入っていたことなどから、不思議なのですが、変な情が生まれてしまい複雑な心境です。

今回の交通事故は自分にとって戒めとして、特に自転車に乗るときなどは、安全確認を良くして、交通ルールは必ず守り交通事故の被害に遭わないように注意していきたいと思っています。

息子を襲った事故

匠瑛市 45歳 女性

今日から夏休み、楽しみにしていた職業体験の打合せの為に息子は、朝、制服を着て自転車で、市内の植木屋さんへと家を出ました。

息子が出掛けてから暫くして、電話が鳴りました。息子が事故に遭ったとの電話でした。

電話から聞こえる救急隊員の「頑張れ」「大丈夫だから」との声を聞き本当に息子は今、事故にあったんだ、これは現実なんだ、早く息子の所へ行ってやらなければと現場に向かいました。

遠くから聞こえる救急車のサイレンの音。

事故現場に着くと私の身体に震えが襲ってきました。息子の自転車は変形し、事故車両は道路を塞ぎ、また前方フロントガラスはクモの巣が張ったようにメチャクチャに壊れていました。

この状況を見て、息子は大丈夫だろうか、苦しい思いをしているのではないか、一人で心細くはないか、早く息子の所へ行かなければ、無事でいて欲しい、病院に向かう途中で私は泣きました。

病院に着いて、やっと息子と会うことが出来ました。処置室のベッドの仰向けに、首は固定され顔は泥まみれ、額、左耳には切り傷が。

私は息子の名前を呼び、大丈夫？痛むか、どこが一番痛いか聞くと、足と訴えました。

小さな声ではあるが、しっかり答えてくれました。掛け物をまくり、足を見ると腫れて、両膝には大人の手の平ぐらいの擦り傷が。時々歯を食いしばって痛みをこらえる息子。

私は何も出来ず、ただ息子の脇に座っていました。検査の結果、右足の骨折と診

断されました。

病院に事故加害者が警察の方と一緒に来ました。ドライバーの方は女性で小さなお子さんを連れていました。どうして事故が起きたのかというと、見通しの悪い十字路での出会い頭の事故で、息子は車の前方にぶつかり飛ばされ田んぼに落ちたとの事でした。飛ばされた所が田んぼじゃなく真夏の道路だったらと思うといたたまれません。また、事故車両には小さなお子さんが同乗していて、お子さんに怪我はないものの、お母さんの運転する車が事故を起こし車は壊れる、恐ろしかった事と思います。

息子の松葉杖生活が始まりました。最初はうまく使えず、泣いたり、私に当たったりしました。事故で楽しみにしていた職業体験もできなくなり、とても残念がっていました。

やろうと思って事故を起こす人はいません。

気のゆるみ、運転マナーで起きてしまう交通事故、自転車の乗り方やヘルメットの装着、夜間のライト点灯など地域のみなさんに指導を頂き、事故を1件でも無くして欲しいです。

息子は今、元気に学校へ登校しています。

体の傷は治っても、夏休みに起きた事故、心に受けた傷はこの先一生忘れることはできないと思います。



「前向きに」

67歳 女性

私は絵を描くのが好きで良く書いていたのですが、今は事故の後遺症により右腕が上がらず満足に書くことが出来ません。また日常生活にも支障をきたして体が事故前の様に動かないことがぐやしくて残念でしかたがありません。

これが現在の私の正直な気持ちです。

私は平成21年11月15日のお昼頃、自転車で自宅から少し離れたスーパーまで買い物に向かう途中、国道を青信号で横断しようとしたところ右側から信号無視をしてきた車にぶつけられ大きな怪我をしてしまいました。

この日、新聞のチラシを見ているとスーパーで特売をやっていたので、少し遠かったのですが自転車で買い物に向かいました。

国道で信号待ちをして信号が変わったので自転車をこぎ出すと右側から白っぽい物体が私に向かってきて「危ない」と思うと同時にものすごい衝撃があって私は自転車と共に国道上に投げ出されてしまったのです。

顔や体が痛くすぐに動く事は出来なかったのですが、このままでは他の車にひかれてしまうと思い、必死で体を引きずりながら歩道に移動すると、通りがかった方が救急車を呼んでくれて病院に運ばれたのです。

後で鏡を見ると、顔は紫色に腫れ上がり、右肘はものすごい痛みでしばらくは苦しみ、肘の骨は粉々になってしまったようで、その後手術を2回したのですが人工の骨とボルトは一生外せないと聞きました。

今は怖くて事故のあった交差点は通ることも出来ず、自転車にも乗ることが出来ません。

また腕が肘より高く上げることが出来無くなってしまったのですが、とても辛いリハビリを自宅や病院で頑張っており、私としては毎日1ミリずつでも良くなって

腕が上がっている様な気がして、先生に見て貰うとあまり変わっていないねと言われてしまいます。

まだまだ病院でリハビリを続けなければならないのですが、間もなく保険の支払いも打ち切られてしまうと聞き、ただ事故前の健康な体に戻りたいだけなのにと言う保険制度の理不尽さを痛感しています。

まだまだ今後の不安もありますが、今は大好きな絵を再び書くためにも、前向きに根気よくリハビリを続けています。

今回、事故の怖さを身をもって体験してしまったのですが、事故の原因は車の運転手さんが同乗者と話をしていたために信号を見落としてしまったと聞きました。車を運転する人としてこのようなことは絶対にあってはならないことですが、自転車や歩行者の方もこれから青信号であっても信号無視をして来る車があるかも知れないと考えるようにしていただければ少しでも事故が防げるかも知れません。



息子と事故と交通安全

40歳代 女性

あの日、息子はいつも通りに塾に行き、「もうそろそろ帰ってくるかな」と思っ
ていても、なかなか帰ってきませんでした。

いつもより遅い帰りに少し不安になり、自宅から息子を捜しに出掛け、少しす
るとパトカーと救急車がいたので、

「もしかしてうちの子かな」

と一瞬頭に思い浮かび、近づいていったところ、道路の端にある自転車を見てみ
ると、

「あの自転車は息子のだ」

とわかり、警察官に話しかけたところ、やはり息子が事故に遭っていました。

その時の事故の状況は、息子は右折してくる車に全く気付かずに車の運転席側
に衝突したとのことでした。

この時、突然の事で一体何が起きたのかわからなかったと後で息子から聞いて
います。

私は、息子が事故に遭い驚いたことと、時々自転車の事故が多いと聞いていま
したが、どこか他人事のように聞いておらず、まさか息子がという思いでした。

私自身普段の生活の中で、子供たちに

「夕方暗くなったらライトをつけるのよ」

また、

「事故に気をつけなさい」

とよく話しているつもりでしたが、そういうと、息子は

「ライトをつけると、自転車が重いからヤダ」

と言い、私も特にそれ以上言うことはありませんでした。

また、そうそう交通事故に遭うこともないだろうという少し甘い考えもありました。

今回息子が事故に遭い、警察官から現在どの位事故が発生しているのか状況を聞き、自転車の関係する交通事故が増えていると知り、これから家庭で出来る交通安全について話を聞き、今回の事故を教訓として、まず子供の立場になって指導することが大切だということがわかりました。

少しずつ大人になっていくと言ってもまだ小学生、まだまだ子供であり、ただ事故に気をつけると言うだけではよく伝わっていないということがわかりました。しっかりとわかりやすく、

「交差点では周りの車とかもよく見なさい」

「車の運転手が見ていないかもしれないよ、見てないかなと思ったら止まるのよ」と少し具体的なアドバイスが必要だということがわかりました。

今後交通事故に遭うことがないように、家庭から交通安全について、母親として子供のために、より子供の視点で指導していかなければいけないと痛感しました。

最後にこの手記を読まれた子を持つ親の方へ、普段忘れがちになっている交通安全ですが、事故が起きてからでは遅いのです。

後悔しないためにも、今一度家庭からできる交通安全について考え直してみましよう。



父の事故

鴨川市 40歳代 女性

それは突然やってきた。

私の父は、若い頃は漁師で毎日元気に海に出て漁をして、私達家族のために仕事を続けてきた。

私の子供時代には、毎日楽しい話をして、夜は一家団らんで食事をしていた。当時、ディズニーランド等は無く、夏休みや冬休み等はどこにも連れて行ってもらえなかったが、私は毎日家族と共に過ごすことが出来ることに幸せを感じ、決して不自由を感じたことはなかった。それは家族が毎日けんかしながらも楽しく過ごしていたからだと思っている。

現役を引退しても、漁港に行っては海の様子や魚の取れ具合等を若い人たちと元気に話をしていた。また、私が結婚して孫が出来てからは毎日孫の面倒に明け暮れ、目を細めていた。

私は毎日幸せを感じながらも、当然の如く今の生活を受け入れていた。

しかし、近所の方から「おじいさんが事故にあった」という1本の電話で、すべてが崩れてしまった。最近の父は、毎日自転車で朝からどこに行くのでもなく、出掛けていき1時間くらい近所を走っては帰ってくる生活を送っていた。

私が「毎日どこに行くの?」と聞くと、「ちょっとな」と言って出て行く。

私は高齢のため危ないなと感じながらも、父の元気な姿を見ていた。

しかし、現実のものになってしまった。私はまさか父が、事故に遭うなんて。という気持ちと、父がどうか助かりますように。という気持ちが入り交じりながら、連絡を受けた病院に赴いた。病院に行くと、近所の人や親戚が待合室にいて今、集中治療室に入っている。かなり重いみたいだ。と聞かされ、自分でもどうして良いか分からない状態であったが、治療の甲斐があり、どうにか一命は取り留めた。

その後の警察の説明では、父が、路地から自転車で飛び出してはねられたと言うことを聞きました。

この事故は、住宅地内の道路で起きた事故で、父が自転車ならやっと通れる道路から、飛び出してはねられたものであった。

その後の父は、長い入院生活を送り、その後もリハビリを行い現在はやっと歩くことが出来る状態まで回復が出来た。

しかし、事故により頭を強く打ってしまったことから、認知症になり、時々意味不明な言葉を発するようになってしまった。事故後警察は何度も病院を訪れたり、自宅を訪れその後の生活や私達の事について気遣ったりしてもらい、心が落ち着いた感じでした。

私も車を運転しますが、いつ事故に遭うかまた事故を起こすか分かりません。

今回の事故で感じたことは、当事者を始め家族全員が不安で、やり場のない気持ちを我慢して過ごしていたことです。

毎日どこかで、交通事故は当たり前のように起きています。また、当たり前のように、命を落とす人がいます。

しかし、これは当たり前ではないのです。異常な出来事です。どうか、私と同じ人が一人でも減ることを祈りつつ、事故に遭った家族として当時の気持ちを書いてみました。



自転車はこんなに危険！

行田東小学校 瀬戸 遙

体験談を紹介します。

私は、自転車で危険な目にあったことがあります。それは、せまい道路で自転車に乗っているおじさんとぶつかりそうになったことです。

その時おじさんに、

「チッ！まったく」

と言われました。私はとても悲しかったです。

このことから、自転車同士がすれちがう道路は広くすればいいのか、と思いました。

もう一つ体験談があります。私が小学3年生の時に交差点で転とうした事です。歩道に上がろうとした時に、タイヤがすべって転びました。この時は、すりきずで済みました。

その日は、自転車でケガをした時の恐ろしさを改めて知りました。

自転車の事故を紹介します。一つ目は、帰宅途中の自転車のライトをつけていない高校生と歩行者がげき突した事故です。歩行者は死亡したそうです。

二つ目は、通学途中の走行中にケータイを使っている高校生が、歩行者とげき突する事故です。歩行者は、せなかのほねを折るひどいケガをしたそうです。この事を知って、私は思いました。

「自転車は、車と同じ位危険だったんだ。」

夜、ライトを使わないで走行すること、ケータイを使用しながらの走行は、とても危険です。

全体的に思ったことが五つあります。

一つ目は、ぶつかりそうになる前に、先にゆずる事です。

二つ目は、ルールをしっかり守ることです。

三つ目は、もしぶつかってしまったら、

「ごめんなさい。」

や、

「すみません。」

とすぐに言うことです。

四つ目は、もしゆずってもらったら、

「ありがとうございます。」

など、お礼の言葉を言うことです。

五つ目は、ゆずり合う気持ちを持つことです。

この五つのことを考えて自転車に乗ると、安心に、快適に、楽しく、事故なく、使用できると思います。



「事故を起こさないためにも」

76歳 女性

私は、歩行中に自転車と衝突して転倒し、右肘を骨折する怪我をしてしまいました。

今は普通に動かすことについては特に支障はありませんが、肘をついたり重い物は持てなくなっていました。

この日私は、日曜日の午前中で近所のパン屋さんまで歩いて行き、買い物を終えて家に帰る途中でした。

自宅のすぐ近くの十字路交差点を横断しようとして、まず右から車が来ないか確認をして、次に左を見るのと同時に自転車とぶつかって転んでしまったのです。

自転車の方がすぐに警察と救急車を呼んでくれて病院で治療を受けたところ、右肘を骨折してしまっていました。

相手の方は若い方で、道路の右側を走行して、もう1台自転車がいたことを考えると、友達と話しながら自転車に乗って前を良く見ていなかったのかも知れません。

私も数年前まで自転車に乗っていたのですが、後ろの安全確認がしづらくなったことから現在はあまり乗っていません。

自転車は手軽な乗り物で非常に便利ですが、スピードも出ますし、一歩間違えれば今回の様に相手に怪我をさせてしまったり、あるいは自分も転んで怪我をしまうこともあります。

やはり、事故を起こさないためには安全確認は大事ですし、交通ルールは絶対に守らなければならないと思います。